2008年（平成20年）
第4号
（4月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

「アフリカへ毛布をおくる運動」始まる

◆キャンペーン期間２００８年４月１日～５月３１日

●当運動のはじまり

１９８４年にアフリカで発生した大干ばつは甚大な被害をもたらし、エチオピアだけでも１００万人以上の人々がいのちを落としたといわれています。この危機的状況に、ジェームス・グラントＵＮＩＣＥＦ事務局長（当時）は全世界に対して毛布２００万枚の緊急支援をよびかけ、日本政府は１００万枚の毛布援助を表明。官民合同の支援活動として、森繁久彌氏を会長とした「アフリカへ毛布を送る会」を発足。日本全国から１７１万枚以上の毛布が寄せられました。

この「アフリカへ毛布を送る会」は、当初目標を大幅に上回る毛布支援を達成したことをもって、翌年７月に解散しました。しかし、依然としてアフリカ各地において毛布のニーズが高いことから、いくつかの団体が合同事業として「アフリカへ毛布をおくる運動」を発足させ、「送る会」の活動を継承して、現在に至っています。

●なぜ毛布が必要なのか

暑い地域になぜ毛布が必要なのかと不思議に思う方もいらっしゃるかと思います。アフリカでは「日中４０度、朝晩３度」と寒暖の差が厳しく、日中は毛布で日差しを防ぎ、朝晩は寒さから身を守ります。そして、命を守るのです。

●どんな毛布をおくれるのか

毛布を受け取るアフリカのみなさんになるべく不公平が生じないよう、シングルサイズ（１４０×２００～２１０㎝）の毛布に限らせていただきます。

・二重毛布はお受けできます。
・船で輸送する間に虫が発生する可能性があるため、使用した毛布は必ずクリーニングか洗濯をお願いします。新品の毛布やすでに洗濯済みの毛布は、そのままで結構です。
・破れたり穴があいた毛布、古く汚れた毛布はお断りしております。
・綿毛布は普通の毛布よりも薄いため、お断りしております。　毛布以外の物（古着、ふとん、夏がけ、タオルケット、シーツ等）はお断りしております。

そして、京都教会ではメッセージを書いた白い布を、毛布１枚１枚に縫いつけて、毛布だけでなく、私たちの心も届けます。

お釈迦様の誕生日（降誕会）について

私たち仏教徒にとって、４月８日は特別な日です。この日に、お釈迦様がお生まれになりました。日本人の生活のあらゆる分野に、お釈迦様が説かれた教えに基づいた考え方が、行き渡っています。

それにもかかわらず、大方の日本人はキリストの誕生日は盛大にお祝いするのに、お釈迦様の誕生日は（クイズに出るぐらい）あまり知られていないことは、仏教徒として忸怩（じくじ）たるものがあります。

お釈迦様は紀元前５世紀頃、北インド・カピラヴァストゥという国（現ネパール領土）のルンビニ園で、シュッドーダナ国王と、マハー・マーヤー夫人との間に生まれ、シッダールタと名付けられました。

誕生したとき、天人が香華を舞い散らせ、竜が清らかな水を降らせて産湯としたという故事にもとづき、「花御堂（はなみどう）」に誕生仏を安置して、甘茶を灌（そそ）ぎます。降誕会が「花まつり」「灌仏会（かんぶつえ）」とも呼ばれる所以がここにあります。

京都教会では、今年は４月６日、寺町三条において、花御堂を出して、市民のみなさんに灌仏していただきました。「子供の頃よくやった」とか「そうなんだ。お釈迦様の誕生日なんだ」と言いながら、多くの方に甘茶を灌いでいただきました。

時事刻々

北京オリンピックの聖火リレーが異常事態になっている。テレビで報道されている様子から、多くの方が違和感を感じていることだろう。

現在の聖火リレーは、ベルリンオリンピックで、ナチスによって導入され、国威高揚が当初の目的だったが、今は平和の祭典としてのセレモニーだ。純粋にスポーツを愛する人たちのものにしてあげたい。

ラグビーでは、試合終了のことをノーサイドという。死力を尽くして戦った相手の健闘を称えあう。その姿にスポーツのフェア精神を見ることができる。

対立するからといって、暴力に訴えるのでなく、十分に議論して、その上で和解に導いてもらいたい。それが世界の大多数の人の願いであるはずだ。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

「比叡山」、そして「故山田恵諦天台座主と庭野開祖」と続いた今シリーズは「宗教協力」の話で完了します。

山田猊下は宗教協力に関して次のように語られています。「宗教の本質は、信仰することによって安心決定して幸せを感じ、心やすらかな生活に入ることにあるから、強烈な信仰心が必要です。しかしその強烈な信仰心が度を越すと人間性を離れ、自己の宗教だけが正しく他を邪教視することになる。」また、「仏教丸という船をつくり宗派を離れ仏教本来の立場を理解してもらいながら人々を船に乗せ、目的先や航路を説明し、どの船室が良いかはその人に決めてもらう。仏教丸には、天台室や禅の部屋・浄土の部屋・新宗教の広間があり、各船室ではお客様が満足し喜ぶ工夫がそれぞれにある(中略)この人に幸せになってもらいたいと願いを持ち信ずるものが手を取り合って進む、そこに宗教の価値があり永遠の命が生まれます。仏教丸の構想も決して夢ではない、世界の宗教と手をつなぐためにはまず仏教が一つになることが宗教協力につながる」、まさに己を忘れて他を利する大乗の精神をもっとも大切にされた山田猊下の宗教協力にたいするお言葉と庭野開祖の思いがまさに一つになって世界宗教者平和会議が進展したと思う。

新刊のご紹介

「開祖さまに倣いて」　次代会長　庭野光祥　著

●教団創立７０周年を記念して

５年前に、次代会長・庭野光祥が委員長となって、『開祖さまの経典』編纂委員会が編成されました。そして、今日に至るまで、膨大な開祖の法話の編纂を重ねてきました。

その編纂作業の成果として、次代会長・庭野光祥が学んだことを、一冊の書物としてまとめたのが、「開祖さまに倣（なら）いて」である。ちょうど今年は、教団創立７０周年にあたり、この記念すべき年のメモリアル・ブックともいえる著書となった。

●著者の思い

著者は、この本の中で、次のように述べている。

「開祖さまは
　法華経の何を信じ
　どのように世界を見ていらっしゃったのか
　そして
　私たちに伝えようとされた真髄とは何だったのか
　私はそれがどうしても知りたくなりました
　開祖さまが見ていらっしゃる仏さまの世界を
　私も見ることができないだろうか
　そう思ったのです――――――」

開祖の孫として、一緒に生活していた次代会長ではあったが、開祖から直接ご法話は受けることはなかったようです。むしろ、日常のさりげない会話や後姿から、多くのことを学んでこられたのでしょう。

学びは「真似る」ことから始まると、よく言われます。そういう意味では、開祖に倣い、真似をしていくことについて、次代会長ほどの適任者はいないでしょう。

●入門書として

本書は、３３の章立てになっています。各章とも、開祖の法話と、その法話に対する次代会長の学びや事例で構成されています。この学びなどの記述が、とてもやさしいタッチで描かれています。

そのおかげで、肩に力が入ることなく、自然に読み込むことができるでしょう。そして、著者の学びを通して、読者も開祖の願いや教えに近づくことができるでしょう。

このような意味から、開祖の教えを学ぶ入門書として読まれることを、お勧めします。本書が、開祖やその教えを学ぶきっかけとなってもらえれば、と思います。

校成会ミニ知識

校成会の教えとは

立正校成会の教えの根本は「法華経」です。そしてその大本は「お釈迦様」であることはご承知の通りです。お釈迦様は生涯の説法で常に「対機説法」の形を取られていたそうです。つまりその人その人に応じた教化の手段をとられていた訳ですね。中国天台宗開祖「智顗（ちぎ）」がお釈迦様のおよそ４０年の説法を年代別に大別すると華厳経→阿含経→維摩経（ゆいまきょう）→般若経→法華経・涅槃経と変化していくとまとめられました。そして開祖さまは法華経にお釈迦様の全てが込められており、この教えで人が救えると感じた訳です。

企業経営と平和のコーナー　「仏教を仕事に生かす」

繁栄する経営とすばらしい人生の為の原則

【我執】

第一は「**己に執らわれるな**」ということです。自分に執らわれる我執に陥ると、自分中心に物事を見て解釈してしまいますから、どうしても物の見方・考え方が偏ります。それでは正確に情報を把握し判断することができず、狂いが生じます。経営で一番恐ろしいのはこれです。では、公平に物事を見て冷静に判断するにはどうしたらいいか?　相手の立場に立つことです。自分ではなく相手の立場で考え、行動するのです。道元禅師が「自分中心にものごとを学ぼうとしてもだめですよ。大宇宙の真理、大自然の摂理に照らして自分を見つめ、学ばなければなりませんよ」と説かれたのも、まさにこのことです。「**己に執らわれるな**」というのは経営の基本中の基本です。

【奉仕と布施】

第二は「**儲けるという発想を持つな**」ということです。相手の立場になって考えれば、お客様に奉仕するという考えが自然に出てきます。奉仕することによってお客様が示してくださる感謝、それが形を変えて利益になるということです。道元禅師は「法も財なり、財も法なり」といわれ、「一句一偈の法をも布施すべし、一銭一草をも布施すべし」と説かれています。商道は布施行である。布施について仏教はこのように説いています。「三輪清浄・三輪空寂の布施」というのです。相手を変え、相手に役立つように行う、それが布施です。たとえば私たちが一生懸命努力して、安くていい商品を開発する。それをお客さまがお買いになる。三者の間には相手の役に立とう、という気持ちがあるだけで後は何もない、すると三者は清められ、売ってやって儲けるとか、安くていい品物だから買えば得をするとか、買ってやったといったものは何もない、つまり「清浄」で「空寂」です。**この布施行の精神は経営には絶対に必要なのです。人生にもまたしかりです。**

【因縁を大切に】

第三は、「因縁」を大切にするということです。この世の中はすべて因縁によって存在している、すなわち縁起の「法」によって成り立っているのです。自分は人間に生まれたいと思って生まれてきた人はひとりもいません。お父さん、お母さんに因縁があってこの世に生を受けるわけです。一人一人がそのような因縁の積み重ねによって今ここにいるわけです。さまざまな人との出会い、**何という因縁でしょう。ほとんど奇跡に近いということになります**。そう考えると、因縁を大事にするのは当然ということになります。会社であれどこであれ、そのひとつひとつの因縁を大切にしていく、そうすれば経営も人間関係もうまくいくのです。

【信頼】

第四は「部下に権限を与えて任せなさい」ということです。そもそも部下に権限も与えず、仕事を任さない上司というのは自己中心で、相手の立場になって考えることができないのです。「部下を育てよう、一人前の仕事がこなせるようにして、どんどん仕事を任せていこう。それが経営にプラスになる」。そんな考えができるような人間でなければ、経営を大きく成長させることはできません。

【仕事の意味】

第五は「**事に仕える**」のが仕事である、ということです。そもそも日本には「仕事」とか「働く」という言葉はあっても労働という言葉はありませんでした。労働という言葉が使われるようになったのは、欧米の文明が入ってきてからです。労働という言葉のニュアンスには仕事を金銭に換算するという感があるものです。「仕事」とは何か。それは仕事という文字に見事に表現されているように「**事に仕える**」。それが仕事なのです。そこには自己中心的な考えはありません。働く対象である「仕事」が先にある。それに仕える、まさに奉仕であり布施行なのです。

成功に共通する五つの要素

【自分を励まし続ける】

人生の崖っぷちに立った時、最後まであきらめずに投げださないで、生き抜けるのは自分を励まし続けることができるかどうかである。他人を励ますことはたやすい、自分を励ますことができて一人前である。

【プラス発想している】

「自分に似合った出来事にしか遭遇しない」こう言ったのは芥川龍之介です。あらゆる出来事は**自分に何かを気づかせるために、天が与えたものだ**。そこで何かとは何かを、しっかり把握する。それで運命が変わって来ます。

【徹底的に反省し、徹底的に感謝する】

並みの反省や感謝では足りない、徹底的に行う。そうすれば**謙虚**になる。**謙虚**になれば衆知(たくさんの人の智慧)を集めることができる。

【社会と調和していくこと】

独りよがりの考えで行動しない。社会は常にその時点で正しい選択をするものなのだ。自分の使命を果たしつつ、それと社会のバランスを常に考えたい。

【天命に従う】

天命には三種類あると言われています。

「運命」　自分の力ではどうにもならないもの。

「使命」　天が人に与えたもの。

「寿命」　人間のキャパシティーを超えたもの。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

宗教の国連　世界宗教者平和会議(WCRP)の創設

庭野開祖は第二バチカン公会議に招かれた時のことを、次のように述懐しています。「バチカン公会議出席が、私の後半生を決定する出会いになったのである。9月 14 日、サン・ピエトロ大聖堂の礼拝堂に世界各国の枢機卿、司教、神学者 2500 余人が会した。

異教徒は私だけであった。公会議は教皇パウロ六世によるミサで始まり、その後パウロ六世が『教会一致』について全世界の司教に語りかけたのである。『キリスト教が分派を生んだ罪は歴代の教皇の罪なのです。いまやキリスト教を初めとして、宗派が分裂している時ではありません。互いに手を取り合って一つの平和へ進む時です。あらゆる人種、あらゆる宗教を信ずる人々に神の愛は平等に与えられなければなりません。私は至らないものですが、カトリックのおきてに従ってイエス・キリストになりかわって教皇をつとめるものです』。私は大きな衝撃を受けた。

パウロ六世教皇の言葉がどれだけの勇気と決断をもって語られた言葉であるか、私には痛いほどわかる気がした。私は胸が熱くなった。世界に 7 億以上の信徒を擁するカトリック教会の権威は『教皇は絶対に誤りをおかすことがない』という教皇の無謬性に発している。パウロ六世教皇は、そのカトリック教会の誤りを認め、教皇自らの罪として懺悔されたのである。

その教皇のお言葉を耳にして、私は筆舌に尽くせぬ感動を覚えた。翌 15 日の夕刻、パウロ六世教皇は私をバチカン教皇庁に招いて、単独会見に応じられたのであった。『遠いところ、公会議にご出席下さって、有難うございました。と私に手を差し伸べられた教皇は、『今や、人類という言葉は隣人という言葉と等しい時代になりました。**キリスト教徒が仏教徒のために祈り、仏教徒がキリスト教徒のために祈って互いに協力しあうのでなければ、宗教が世界の平和に貢献することは出来ません。**それ以外に道はないのです』と語られたのであった。

私のカトリックへの疑問は、いっぺんに吹き飛んだ。宗教は自分の教団の教勢を伸ばすことが目的なのではない。人々の心に平安をもたらし、世界に平和をもたらすために存在するものだ。その宗教が教義上の用語や儀式の違いにとらわれて、争いあうことほど愚かなことはない。これまで、私が繰り返し繰り返し自分に言い聞かせ、人々に語ってきたことが間違っていなかったことを、私はローマ教皇に証明して頂けた思いだった。1000 年以上にわたって、他宗教に対して固く閉ざされていたバチカンの重い扉が開かれていくのを、私はまのあたりにしたのである。『世界平和のために、精一杯の努力をすることをお約束します。』私もパウロ六世教皇の手をしっかり握り返して申し上げた。

その私の胸に、ひとつの決意が生まれていた。『**世界の宗教者がひとつのテーブルについて、平和のためにどう力を合わせられるか話し合うことができないものか、それを実現させるためならば、私は使い走りでも何でも身を粉にしてやらせてもらおう。**』まだ、漠然としたものではあったが、世界宗教者平和会議の構想が私の胸に芽生えかけていたのである。

この第二バチカン公会議を機に教会一致運動(エキュメニカル・ムーブメント)は急速に拍車がかかっていき、それが世界の宗教界に対話の時代をもたらしました。パウロ六世は、900 年にわたり相互破門の関係にあった東方ギリシャ正教会、さらにプロテスタント教会、英国聖公会に対して、カトリック教会の方から態度を改めることを宣言し、自ら東方ギリシャ正教会のアテナゴラス総主教を訪ね、また英国聖公会のカンタベリー大主教との対話をもつなど、教会一致のための活動を強力に推進されてきたのであった。」

実は、このバチカン公会議こそが新しい宗教対話の時代をもたらしてくれたのです。それを開いたのはパウロ六世教皇でありバチカンでした。そして、その道を着々と作り上げて行ったのが庭野開祖だったのです。

「宗教者の私にとって一番残念なことは、『宗教が介在するために戦争が起こり、事態が深刻化するのだ』と言われることでした。**宗教が戦争を起こしたのではなく、戦争を起こしたのは人間なのです。**そのために私は『宗教の国連』といわれる『世界宗教者平和会議』の創設に力を注いだとも言えます。」

庭野開祖の願いは、「**心の国連、宗教の国連**」を作りたいというものでした。ちなみに、WCRP の本部はニューヨークの国連本部のすぐ近くにあります。その願いの大きさを物語るように・・・。　(つづく)

渉外部からのメッセージ

桜が咲くぽかぽか陽気の春がやってきました。この平安月報が皆さんのお手元に届くころは花見が出来るのも残すところあとわずかになっているかもしれません。淡いピンクの花びらがひらひらと舞う風景を見ると京都に生まれ育って本当によかったなぁと思います。四季折々の豊かな風情がある京都を心豊かな人たちで魅力ある街にしていきたいものです。

この「平安月報」は下記アドレスからダウンロードできます。是非、ご覧ください。

http://www.rkk-kinki.jp/kinki/thats_kyoto.html